

信州気候変動適応センター通信 No.8

放置竹林と気候変動 —「ゼロカーボンミーティング in 佐久」に協力しました

2025年12月15日、佐久合同庁舎にて「ゼロカーボンミーティング in 佐久～竹林増加の影響から佐久地域の気候変動を考える～」が開催され、信州気候変動適応センターも展示や講演で協力しました。当日は約50名の参加者が集まり、地域の課題である「放置竹林」を切り口に、気候変動への適応と緩和について多角的な議論が行われました。

身近な「適応」としての竹林対策

竹は年に数メートルの速度で広がる能力があるため、放置すれば里山や河畔林が竹林に置き換わり、生物多様性や土地管理に影響が及びます。適応センタースタッフ（高野）の講演では、竹林は①外来種（ハチクやモウソウチク等のマダケ属は国が産業管理外来種*に指定）、②人口減少等に起因する管理放棄に加え、③気候変動による生育適地の拡大（図1）という「複合問題」であることを指摘しました。講演では、人口減少を見据え、地域の余力があるうちに「残す竹林」と「手じまいする竹林」を選別し、100年後にどのような地域にしたいかを考える「適応策」としての検討を提案しました。

「緩和」と「自分事化」の両輪で

気候変動対策には、こうした影響に備える「適応」と同時に、原因となる温室効果ガスを減らす「緩和」が不可欠です。長野県地球温暖化防止活動推進員の鈴木智子氏による講演「気候変動 わたしたちにできること」では、国際的な枠組みの話にとどまらず、松本市の気候市民会議の事例などを交え、個人のライフスタイル転換がいかに重要かが語られました。また、県環境部ゼロカーボン推進課からは「2050ゼロカーボンの実現に向けた県の取組」として、省エネ家電やソー



写真 会場では竹林活用の展示やCO₂の重さ体験も行われ、活発な情報交換がなされた。

ラー普及などの緊急支援事業や、2050年のゴールを見据えたロードマップが提示されました。

地域資源としての活用と未来

会場では、竹林問題を前向きな「活用」で解決しようとする動きも紹介されました。佐久地域で活動する団体「ミルプロット」によるブース展示（写真1奥）では、厄介者扱いされがちな竹を「淡竹（はちく）パウダー」として資源化する取り組みや、楽しみながら課題解決を図る活動の様子が共有され、多くの参加者が足を止めていました。竹林問題は、まさに目に見える「身近な気候変動」です。今回のミーティングは、行政・研究機関・市民団体がそれぞれの知見を共有し、地域の自然を守るために「今、何ができるか」を共に考える貴重な機会となりました。

（高野 宏平／自然環境部）

* 産業又は公益性において重要で、代替性がなく、その利用にあたっては適切な管理が必要な外来種

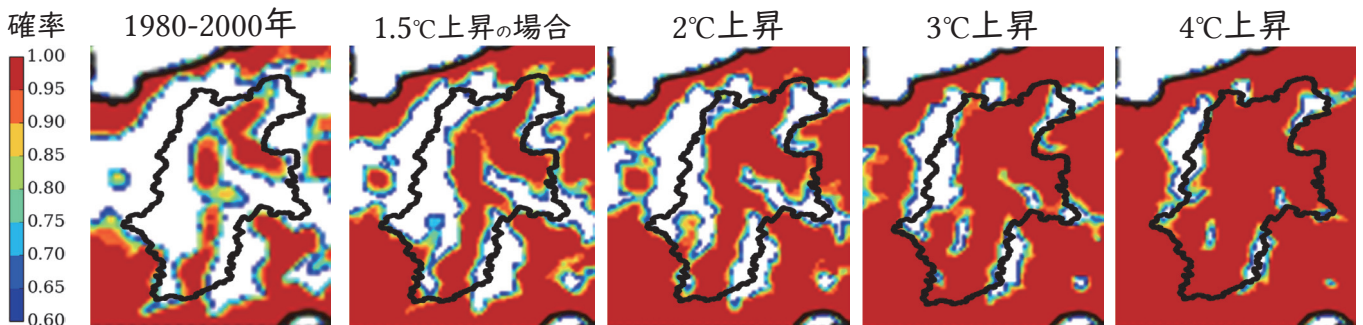


図1 長野県における竹林の生育に適した環境の将来予測
現在（左上）と比較し、気温が上昇（右へ移行）するにつれ、赤色で示される「生育に適したエリア」が県全域、特に標高の高い地域へと拡大する予測が示されている（Takano et al. 2017 をもとに作成）。